

令和2年度 学力向上指導改善プラン

三田市立狭間小学校長 佐野 秀樹

学校教育目標		豊かな心で、自ら考え行動できる子の育成	
推進主体		学力向上推進委員会 (校長、教頭並びに学校改革、教育計画、学校評価、研究推進、生徒指導、保幼・小・中連携の各担当)	
学力に関する前年度の状況・経年の課題等			
学力的状況	全国学力・学習状況調査結果の状況(国語、算数・数学に関する質問紙調査の結果も含む)	国語	◇ここ数年、課題として取り組んできた「表現力」については、様々な教科・領域における表現の場を提供し経験させることにより、子どもたちの力の伸びを感じることができた。思考の深まりにもつながってきたと感じる。「書く能力」についても継続的な取り組みにより力の伸びが見られた。 ◆「言語力(漢字)」については、6年間でつくれる力ということで、長い目で見るのが大切だとは感じる。日ごろの授業での取り組みについては、色々な指導法を模索していく必要がある。
		算数	◇算数科の授業での取り組みや、新学習システム教員との連携での継続的な取り組みから、計算技能面での伸びが見られた。 ◇算数科の学習において、学力調査から本校児童が「図やグラフ化する技能」について力をつける必要があると捉え授業実践してきた結果、技能の向上が見られた。 ◆担任と新学習システム教員の連携(授業展開)をはかたり、「ひょうごがんぱりタイム」を活用したりしながら、立式についての思考力アップを図ってきた。個々の授業において改善は見られるものの、全般的な共通実践を図っていく必要性を感じる。
	定期テスト、単元テストなどによる状況(各教科)		◇日ごろからの継続的な取り組みが漢字や計算技能の向上につながっている。定期テスト等でも結果となって表れてきたと思われる。今年度もこの積み上げを継続するとともに、新学習指導要領に合わせた学力の定着を図るように取り組む。
授業等からうかがえる状況(各教科)			◇一時間の授業の流れとして「めあて」と「振り返り」を意識して展開してきた。その取り組みが結果となって表れてきたと感じる。 ◇ペア・グループ活動を積極的に取り入れた授業展開も効果が現れている。今後この取り組みを継続したい。 ◆主体的に学習に取り組む子供たちを目指し、授業改善を目指す。
学力向上に係る学習習慣・生活習慣	全国学力・学習状況調査の質問紙の状況		
	学校評価などのアンケート調査による児童・生徒の状況		◇◆家庭学習について年度末アンケートの結果、宿題をする習慣は定着してきていると考えられる。保護者のアンケート「進んで宿題や調べ学習をしている」という項目では、65%という結果であった。家庭学習の手引きの活用をさらに推進し、自主的な学習にまで発展させられるような工夫が必要である。 ◇多くの児童が本を読むことを好んでいる。授業中での図書活用だけでなく、選書会や本の予約会、図書まつりなど児童が図書に親しむ機会が多く工夫されている成果があらわれている。読書通帳の活用について広く紹介され、児童の読書への関心意欲となっている。 ◇「狭間フェスティバル」で、学習したことを全校児童・保護者、地域の方に向けて、体験・表現型で発表する場を設けた。児童は、これまでに学んだことを生き生きと表現できていた。
校内研究・研修の状況	校内研究の状況		◇全教員が授業公開を実施し、事前・事後研修会で成果と課題を共有できた。 ◇これまでの研究や体制をふりかえることができた。必要に応じて今後の研究体制、内容(研究テーマ・評価方法等)を改善していく。 ◆狭間独自の豪華的な指導案を各学年の年間授業計画に整理していく。 ◆英語の音声指導であるフォニックス指導法の校内研修を年度初めに設定し、定期的に取り組むを続ける。
	校内研修の状況		◇巡回相談や教育相談を活用して児童理解に取り組んだ。年度を越えた引継ぎも視野に入れて取り組んでいく。 ◇道徳・生指研修等を通して、子どもの心に寄り添う授業を目指し、教師の授業力向上につながった。 ◇各分野の研修資料を共有し、校内研修で交流する機会を設け、授業改善につながった。
家庭・校種間連携	家庭・地域等の状況		◇年間の見直しを持って、学校生活ボランティアとの交流に取り組むことができた。今後も引き続き、地域との連携をとるための体制を整えていく。 ◆今後も引き続き、地域の人材を発掘し、連携体制を整えていく。
	小・中における教科連携等の状況		◇教科担任制を実施することで、教師の専門性を生かし、基礎学力の向上を図ることができた。 ◇小中連携により、学期に1回の生徒指導上の情報交換、オープンスクールでの狭間中による体験授業、狭間中生徒会による中学校生活の紹介、狭間中による英語授業のビデオ視聴などをおこない、連携を深めることができた。 ◆小中連携体制を構築していく必要がある。

4月		2～3月			
学力向上に向けての重点的な目標	成果となる目標	具体的な行動目標	年度末評価		
	(指標となる数値等)	(成果目標達成のための具体的な手立て等)		(今年度の成果と来年度に向けた課題等)	
A アクティブラーニングを意識した授業の確立	・めあて、学習のながれの提示により、ユニバーサルデザインの授業づくりを意識する。 ・めあてを意識した振り返りをさせる。 ・課題設定の工夫、効果的な言語活動、相互交流に重点をおいた授業展開をする。 ・授業形態の工夫をする。	・めあて、学習のながれの提示により、個々が何を、どの手順でどのように学ぶのか、見直しをもって粘り強く学べるようにする。 ・振り返りをおこなうことで、何ができるようになるのか、何ができるようになったのか、メタ認知できるようにする。 ・個人思考、ペアトーク、グループトークなどの授業形態を工夫し、個々の思考の時間、共に考える機会の確保をはかる。 ・「わかった」「おもしろい」と思えるような授業を展開する。	◇学習の流れの提示の仕方を校内で統一した。それによって、児童が見直しをもって学ぶことができるようになった。支援の必要な児童も、安心して教室にいられるようになった。 ◇時間ごとまたは単元ごとのめあてを共有することで、自分が何を学んでどこまでできるようになったか、めあてをもとに振り返りができた。 ◆感染症拡大防止のため、授業形態が大きく制限された。個人思考を深めるためには、ペアトーク、グループトークは欠かせない。多人数の学級でも多様な授業形態がとれるよう、ホワイトボードやタブレットの活用など、多様な学習方法も検証する。	B	
	B 思考力・表現力の育成 ○基礎基本の充実	・言語領域、計算などの技能領域の力をつける。	・言語領域(漢字)の学習については、漢字テストなどで日々達成度を把握し、個々のサポートに生かしていくようにする。また、意欲的に取り組めるよう、評価を工夫する。 ・計算力をつけるため、継続的なドリル学習やプリント学習で、四則計算の定着をはかる。新学習システム教員と連携しながら、個別指導の充実を図る。	◇週3回の朝学習で、学習習慣が定着しつつある。朝学習を活用して、漢字や計算、外国語の音声指導(フォニックス)などの学習を行った。反復学習によって、基礎基本の力が身につくようになった。また、算数科では、新学習システム教員との連携による、個に応じた指導により、計算力など技能に伸びがみられた。	B
	○ノートづくり	・自分の考えや友だちの考えを記し、思考の流れを残すようにする。 ・図や表を用いながら、物事、数量の関係を捉えたり、表したりできるようにする。 ・めあてと振り返りを書き、身についたことを意識させる。	・学年や発達段階に応じたノート指導を行う。(課題・式・図表・理由・ポイントの記入) ・自らの考え、思考過程、理由、根拠などが分かりやすく記述できるようにしていく。 ・めあてに対する具体的な振り返りを常に意識させる。	◇めあてを持って授業に臨み、振り返りができるようになってきた。 ◆児童自身が、できるようになったことや努力すべきことについて、具体的に自己評価できるようになるために、ルーブリックを作成・活用していく。 ◆担任と新学習システム教員が連携して授業展開したり、「がんぱりタイム」を活用したりしながら、思考力の向上を図ってきた。粘り強く学ぶ姿が見られるようになってきているが、さらに向上させていく必要がある。	
○読む力の育成	・音読表現を工夫することができる。 ・課題に沿って情報を取り出し、解釈することができる。	・段落相互の関係や文章構成、重要語句、登場人物の変化、情景の変化など、教材の特性に合わせてより焦点化させて授業を展開する。 ・音読カードなどを活用して、継続的な音読指導を行い、確実に評価する。	◆授業の中で、音読の指導が十分でない現状の中、家庭学習で継続的に音読練習を行い、音読表現ができるようにしていきたい。また、必然性をもって繰り返し読むことで、文章の内容理解につなげる。		
○根拠や理由に基づいて考える力の育成をはかるためのカリキュラムマネジメント	・理由や根拠を明らかにして、書いたり話したりすることができるようにする。 ・場に応じた表現の工夫をさせる。 ・友だちと共に考え学ぶことによって、新しい発見や豊かな発想が生まれる授業の工夫をする。	・課題に沿って考え、解決していくために、学習内容を焦点化する。 ・学習発表の場を設けたり、異学年交流をしたりする中で、相手意識を持った表現力を伸ばす。 ・全校行事「狭間フェスティバル」(3学期)において、教科学習を活かした発表をする。体験型ワークショップで、表現する力を養う。 ・少人数で話し合う場の設定を多く取り入れ、話し合いの「めあて」「ルール」を明確にする。	◇日常の授業の中でノートやワークシート、発表方法など指導方法を工夫することで、自分の考えをもち、整理できるようになった。 ◇「狭間フェスティバル」では、感染予防に配慮しながら、体験型ワークショップを工夫して行い、全校的に交流することができた。 ◆学習発表の場が制限され、異学年との交流や、発表を伴う表現活動が十分行えなかったため、表現力の伸長に欠かせない相手意識に課題がある。今後はICTなどを活用した取り組みを工夫していく。		
C 家庭学習の習慣の確立と充実	・家庭学習の手引きの見直しを行う。手引きに基づき学級指導し、家庭へ配布、懇談で啓発する。 ・家庭学習が授業に活かされるような課題を工夫する。	・家庭学習の指標として、家庭学習の手引き「夢に向かって狭間っこ」について、自主学習の内容などの見直しをおこない、学年に応じてどんな内容をどんなふう学習したらよいか、児童に具体的に示し指導する。	◇◆年度当初の休校措置の際に、家庭学習の手引き「夢に向かって狭間っこ」を配布し、家庭学習の指標とした。計画的に活用を促すようにしていきたい。さらに効果的な活用方法を考えしていきたい。家庭学習の充実には基礎基本の定着には不可欠であるので、今後も積極的に進めていく。 ◇どんな学び方が良いのか、具体的に示すために、月1回の「漢字ノートコンクール」、随時の「自分学習ノートコンクール」のコーナーを掲示板に設けた。その良さを示すことで、一人学びの手本にするとともに、学習意欲の向上につながった。	B	
D 読書活動の推進	・本を読むことを楽しむ児童の増加を目指す。 ・本を資料として活用できる(本の紹介、調べ学習など)児童の増加を目指す。	・学校司書教諭・図書ボランティアとの連携をはかり、読書に興味をもてる工夫をする。 ・読書通帳の活用。 ・各教科の中で、活用できる本(資料)を提示し、学習活動に広がりを持たせられるよう支援する。	◇感染症拡大防止のため、図書室の開放や図書ボランティアの活動が制限され、読書活動推進のための環境が疎外されたが、図書室の環境づくりをはじめ、新刊の選書会や予約会を工夫して行うことができた。 ◇読書通帳達成賞や年間百冊読書賞など、読書に取り組む機会を増やす工夫もされた。今年度は新しく、ステージ別読書に取り組み、多様なジャンルの本を読破することに、喜びを見出す児童の姿が多く見られ読書の幅が広がった。 ◆教育課程上読書時間の十分な確保が難しかった。今後は、家庭生活も含め、日常の読書の習慣化に向けて取り組みを進めたい。 ◆「狭間っ子読書の日」を有効に活用できるようにしていく必要がある。	A	
E 児童理解に基づいた指導体制の確立 ○主体的に楽しみながら外国語を学び合い、自分の思いや考えを豊かに表現できる子どもを育成する。	・教材に適した授業展開・指導法を通して、主体的に楽しみながら外国語を学び合う子どもを育成する。 ・自分の思いや考えを豊かに表現するための必要な手立てを、意図的に講じる。	・全教員が授業公開を実施する。 ・研究授業では、事前研修会を持ち、研究課題を明らかにし、ワークショップ型の事後研修会により成果と課題を共有する。 ・毎授業のふりかえりと次授業のめあての提示をする。 ・音声指導を3年生から取り入れ、音声と文字のつながり意識させ、英語スキルの定着をはかる。 ・自分の思いや考えを豊かに表現するために必要な手立てを、系統だてて実施する。	◇目指す児童の姿を系統立てて明確化し、年間を通して指導することができた。 ◇研究授業では、研究課題を明らかにして事前・事後研修会を持ち、成果と課題を共有することができた。来年度は、学習評価につながる評価基準(長期的ルーブリック等)の作成を目指すことが共通理解できた。 ◇ホワイトボードで授業の流れを示し、めあてやふりかえり、次授業のめあての提示したことで、見直しをもって授業にのぞみ。学んだことを整理することができた。 ◆年度当初に一年間の研究の進め方を明確にし、系統立ててテーマを全職員で共通理解していく。	B	
	○一人一人の児童にあう支援を行う。 ○それぞれの教科や、教材の特性を踏まえた授業展開を通して、児童の総合的な力を育成する。	・全ての児童にとって分かりやすい手立てを講じた授業を構築する。 ・研修を教育課題に応じて行うことで、専門性を高める。	・児童理解の研修会を年度当初に行い、巡回相談や教育相談を積極的に活用する。 ・研修資料の共通理解と共有行動を図る。 ・各教員の得意な教科や分野、領域、指導法を交流することで、さらなる授業改善を目指す。	◇年度初め・終わりの児童理解研修会を活用し、全職員が一人ひとりの児童について共通理解することができた。さらに、巡回相談や教育相談を積極的に活用し、深い児童理解につとめるた。 ◆各教員の得意な教科や分野、領域、指導法を交流する場を、計画的に設定する。 ◇児童の取り組んだ成果物(作品やノート等)を掲示して可視化することにより、全ての児童が目指すものや姿勢が明確となり、教員の意識も高まった。	
F 社会に開かれた教育課程を支える風土の醸成	○地域ボランティアと連絡を密に取り、相互に効果が生まれる連携。 ○教師の専門性を生かして、教科担任制を推進していく。 ○小学校と中学校とで、連携を強化する。	・広い分野で多くの学校支援ボランティアの活用を推進する。	・ボランティアとの交流を、単元構想に位置付けて、年間を通して計画的に行えるようにしていく。 ・コーディネーター的な地域人材を発掘する。 ・学校地域運営協議会において協議する。そして、それぞれの役割について確認していく。	◇コロナ禍の中で、保護者や地域の方に、ボランティアとして学習支援をってもらう機会が設定できなかったが、図書ボランティアの図書室の環境整備、登下校の見守りなど、温かく見守っていただいた。 ◆学校地域運営協議会が、2回は紙上開催となり、具体的な意見交流を行うことができなかった。今後も開催に向けて、時期等を検討していく。 ◆地域ボランティアと学校をつなぐ、コーディネーターを今後も探していく。	B
	◇教科担任制を実施することで、教師の専門性を生かし、基礎学力の向上や中学校への円滑な移行を図る。 ◇小中連携の強化(相互校の実情理解、児童会生徒会交流、生徒指導情報共有など)をする	・交換授業による教科担任制の授業を実施する。 ・中学校からの出前授業を実施し、円滑な小中接続に努める。 ・本校の研究授業や研修について、中学校にも案内し交流する。 ・生徒指導上の情報を共有し、連携を深める。	◇教科担任制を実施することで、教師の専門性を生かし、魅力ある授業づくりができ、児童の基礎学力向上につながった。 ◇小中連携により、生徒指導上・特別支援教育上の視点で情報交換を行った。また、中学校の生徒会が来校して、あいさつ運動や中学校生活のプレゼン(6年生対象)を実施し、連携をはかることで、中学校生活へのスムーズな移行を目指した。 ◆出前授業や研究授業の交流など、来年度は計画実施する予定である。		